

伊予市三秋地区

地域活性の一翼に

松山から車で30分、松山自動車道と伊予灘との間に山あり、観光列車「伊予灘ものがり」が走るJR予讃線海沿いの沿線に位置する、人口約370人の集落が伊予市三秋地区。ここに2015年、地域の情報発信基地として誕生したのが、当新聞「地域新聞みあき」です。ひとりでも多くの方に三秋地区の魅力や集落にしていきたいという思いで、紙面製作はもちろし、イベントも企画して参りました。そこへ舞い込んできたのが、今回の「集落活性化モデル構築事業」（以下「本事業」）。藤山先生の分析を基に、住民同士でのワークショップを経て、うすは、三秋地区を知ってもらうためのイベント「明神山古道登山」と「レンコン収穫・試食体験会」を開催することになりました。

賽は投げられた！

●明神山古道の復活



敷に埋もれた明神山古道

地区内のため池にレンコンが自生しているのを発見。これを上手に活用できないかというところで検討したのですが、池のレンコンを掘り出すには、かなりの労力と危険を伴う為、イベントを行うには不適合。そこで、安全な田んぼにレンコンを植え付け、親子でも参加できるように整備しました。

●もう一歩！三秋地区へ  
前日の雨から一転、朝から秋晴れとなった2019年11月23日、フリーペーパー等で募集した登山・レンコン収穫合わせで、約70名の方が三秋集会所に集合。スタッフが含めると総勢100名の人々が一堂に会すると、三秋地区が始まって以来最大規模のイベントが開催されました。最初に合同開会式を終え、登山組とレンコン収穫組とに分かれて、イベントはスタート。



種レンコンの植え付け

●親子で参加できるレンコン畑に  
登山組は、先導スタッフに連れられ、登山道入り口へ。そこから、復活したばかりの古道を歩一歩、慎重に登っていきま



イベント開会式の様子



敷の合間から望む伊予灘



三秋産野菜を使った特製弁当



明神山山頂(634m)にて

一方のレンコン収穫組は、初めに、レンコンの掘り方について説明を受けた後、各自一斉に収穫開始。泥んこになりながら、途中でレンコンを折らないよう慎重に掘り進めました。昼食は、三秋のご婦人たちが「レンコンの天ぷら」をはじめ、



途中で折らないよう慎重に



大きくて立派なレンコンを採ったぞ〜！



シシ鍋で心も身体もぽっかぽっか

「本事業」は、今年度で終了しますが、次年度も開催できるよう地域一丸となって、取り組

編集後記

今回は、「集落活性化モデル構築事業」記念として、3地区合同記事を製作いたしました。せっかくの縁ですし、今度は映像を作りたいなあ。例えば、昔、某鉄道会社のCMで「三都物語」ってありましたが、「三地区物語」と題して、3地区のPR動画をYouTubeで配信してみたいというのはいかがでしょうか・・・。(ひろ)



原田 浩明(はらだ ひろあき) 「地域新聞みあき」 代表

地域新聞みあき製作委員会  
令和2年2月1日 発行  
連絡先 info.miaki@gmail.com  
県の「集落活性化モデル構築事業」モデル  
3地区【松野町藤生(わらびょう)・奥野川、愛南町緑、伊予市三秋】の取り組みを特集した特別記念号



田園回帰1%戦略とは？

伊予市三秋地区 松野町藤生・奥野川地区そして愛南町緑地区で、愛媛県の「集落活性化モデル構築事業」が始まり、2年が経とうとしています。

この「事業」は、「田園回帰1%戦略」という考え方を土台にしては、平均すれば毎年人口の1%程度、つまり住民100人につき1人の定住増加を実現すれば、概ね地域人口が長期的に安定するという理論です。

●三秋地区でも1%で安定化

実際に、三秋地区において最新のデータで計算してみよう。まず、2014年と2019年の住民基本台帳を基に、現行推移の将来予測をしてみま



図1 現行推移人口予測

三秋地区では、ここ5年で少子連れ世帯が流入しています。が、まだ人口の長期的な安定は、達成されていません。そこで人口の1%分の定住増を加えて3世代のバランスをとって、進めて見ます。具体的には、20代前半男女、30代前半子連れ夫婦、60代前半夫婦の定住を2年に1組ずつ増やしてみます。

現行推移時の人口予測



図2 1%戦略時人口予測

小中学生の数についても、現在の16人よりも若干多い19人程度で安定します。

●持続可能な未来に先着

今回の「事業」は、このような地域診断と戦略を基に、3つの地域の特徴と底力を活かした地域づくりに挑戦してきました。地域ごとに果敢なチャレンジをするだけでなく、時には3つの地域で交流し、お互いに励ましながら展開したことに大きな意義があると思います。

これからは、循環型社会に進化していく時代です。それぞれが循環の仕組みをつくり、そしてお互いを結び直していくことが求められています。三秋をはじめ、美しい自然に恵まれた今回、美しさを活かして、持続可能な未来に先着できる可能性を持っています。そうした希望を、小さな活動を積み重ねる中で共有し

1%戦略時の人口予測

同時に、出生率を現在の1.02から2.07に引き上げ、10.8代後半から20代前半にかけての流出率(男性17%、女性33%)を半分に抑えます。そうすると、人口・高齢化率の長期的安定が見えてきます。



三秋地区での現地視察(2018.7.3)



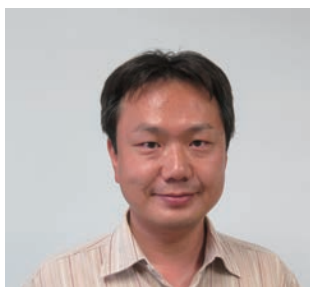
藤山 浩(ふじやまこう) 一般社団法人 持続可能な地域社会総合研究所 所長

住民の主体性を育ててきた2年間

「仏作って魂入れず」...。地域活動に於て、この言葉は重要な意味を持っています。活動には組織や仕組みが必要ですが、最も肝心なのはそれに携わる地元住民が主体性を発揮することにあるためです。人任せではなく、住民自身が考え、決定し、企画や計画を立て、実践する行動力が最も重要です。住民の主体性が既にあり、それが具体的な活動として発現す



三秋地区で自生レンコン試食(2018.11.6)



笠松 浩樹(かさまつひろき) 愛媛大学 社会共創学部 特任講師

◆執筆者プロフィール

愛媛大学社会共創学部地域資源マネジメント学科特任講師。1969年石川県山中町(現加賀市)生まれ。愛媛県松山市在住。1998年より島根県中山間地域研究センター研究員。2011年愛媛大学農学部農山村地域マネジメント学コース助教。2016年より現職。専門は、資源の自給・循環、地域コミュニティ、条件不利地域の生活実態、農林などの、幅広く研究活動を行っている。





# 松野町藤生・奥野川地区

のどかな二つの集落  
がタッグ、人口維持への  
ゴングが鳴った！

伊予と土佐をつなぐ交通、経済の要衝として栄えた宿場町、愛媛県北宇和郡松野町。人口はわずか4000人。愛媛で最も小さい町。でもだからこそ、里山らしい強い絆にあふれつつ、宿場町の伝統が育んだ、よそ者への優しさをもたれた町です。また、そこは愛媛の最西部。四万十水系の2つの支流、と、南予屈指の鬼ヶ城山系、汚れなき山河がありなす深山幽谷の世界。キャオニングにバイクレース。非日常のアウトドアも、松野なら「すぐそこ」。



1年目の会合の様子



- 1 恋と結婚を増やそう！仕事をくろう！
- 2 帰郷の機会を！
- 3 小さい集団で動こう！
- 4 空き家を賃し家に！
- 5 もう一回山を元気に！
- 6

1年目の取り組み「課題は出た、さあ、リングに上がるのはだれだ？」

天が満までの間道に家々が点在する「奥野川地区」がタッグ。移住促進、人口維持を目標にこの連携事業に参加し

2年目その1「もうちょっと少人数でファイトしてみようぜ！」

昨年年度の反省として、里の全員を集めたような大きな会合では、里山独特の「シャイさ」が皆の口をつぐませるため、今度は少数精鋭、1年目の会議で積極的に参加、発言してくれた猛者だけを集め話し合ってみました。するとこんな意見が！

「まず、我々はこのとき「基本的な今、我々はとくに困ってない」といった意見が出たことである。」「覚悟を持って子供たち「都会へ出る」といつたのであるから、今さら「戻ってこい」というつもりはないの、自分の子らさず住もうとしないの、よその人が移住するとは思えない」とも。しかしながら一方で「ホントーのホントーは、みんな跡継ぎがほしい」「里から人がいなくなるのはさみしい」という意見もあって、でも「仕事がないから仕方ないですらう」という話になって。結局こいつは、ぐるっと話が元に戻ってしまっ

2年目その2「カール・ゴッチが佐那河内か、地域づくり虎の穴へ研修旅行」

事業は完全に行き詰まり思案投げ首状態。と、ここに徳島県佐那河内（さなごうち）村、という村がありました。明治22年以來、一度も合併したことが



佐那河内研修、古民家見学



佐那河内のみなさんと交流会



執筆者プロフィール



矢間 大藏(やざま だいぞう)

1974年1月18日生まれ。松野町藤生地区在住。愛媛県宇和島市出身。2014年、松野町に移住。同地の初代地域おこし協力隊に就任。農業再生に取り組み、エディタは農家、書家、コピーライター。現在、松野町に移住支援コーディネーター。ラジオパーソナリティとして活躍。現在、松野町と佐那河内とで協力を進め、関係者とともに松野町の良さを世界へ発信中。総務省主催「地域おこし協力隊サミット」大阪にて活動報告を行うなど松野をPRする内外さまざまなシーンに出演多数。

## 愛南町緑地区

愛南・緑から次の暮らしと未来をつくる

次世代へフルサトをつなぐために



緑八朔相撲に参加した甲南大学の学生たち

「まるごと緑」は、愛南町・緑地域の魅力を次世代に引き継いでいこうと平成28年7月に発足した住民団体です。地域課題解決部、産業振興部、移住観光部の三つの専門部会をつくり、地域おこし協力隊等と連携して、地域の課題解決の仕組みづくりや特産品開発、各種イベント企画などに取り組みできました。

平成30年度からは「愛媛県集落活性化モデル構築事業」のモデル地区に指定されて新たなチャレンジがスタート。これまで地域の人たちとともに議論と試行錯誤を繰り返しながら小さな実践を進めてきました。今夏では「新たな人の流れを生むネットワーキング」地域資源を活用した「仕事づくり」の二つに分類して主な関連事業を紹介しします。

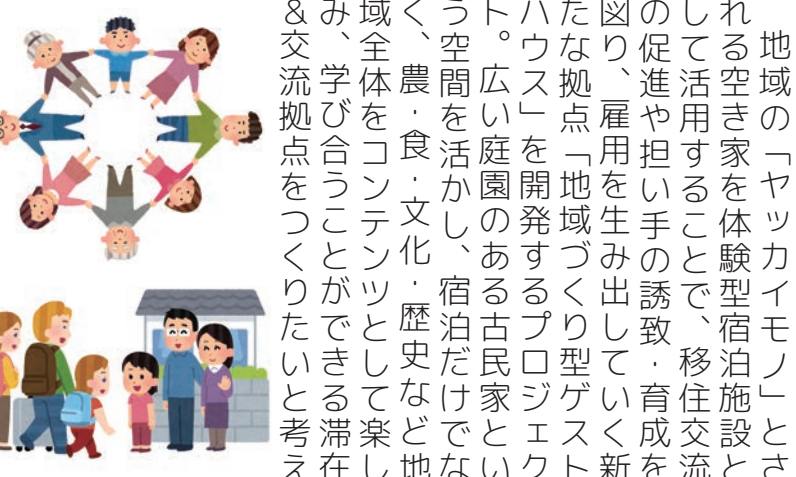
観光地ではなく、関係地をめざしたい

「まるごと緑」では、人口を取り戻すためには、まず地域の魅力を知らせ、機会創出が必要だと考え、様々な事業に取り組んできました。その一つが「学び」を重視した体験プログラム。これは愛南町・緑地域を学びの場として位置づけ、多様な得意技を持つ地域の達人から生かす力や生活に根ざした知識を学ぶことができる体験事業です。

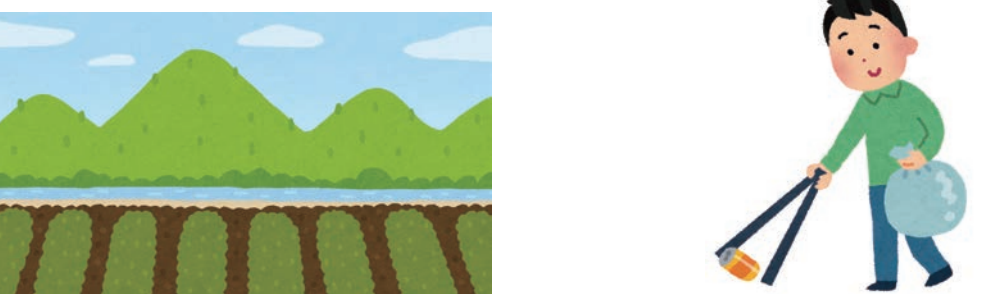
昨年9月には、神戸市にある



愛南から新たな食文化を発信したい



地域活動(僧都川クリーン作戦)



地域の「ヤッカイモノ」を稼ぐ力に

2. 地域づくり型ゲストハウス



これからの地域創生にも必要なのは、地域資源を活かした仕事づくり。「まるごと緑」では、地域に人と経済の「循環」を生むプロジェクトをサポ



「緑の日常に出会う」をコンセプトに

愛南町では、若者（特に20代、30代の女性）の流出が加速し、人口減少・高齢化が顕著になってきています。他方、私たちが暮らす緑地域でも担い手不足の傾向に歯止めがかかっている。持続可能な地域社会の仕組みづくりが急務となっています。地域づくりはボランティアではなく、継続可能な力を生み出すことです。また、行政任せでなく、地域性、感性、事業性などを大事にして各種事業に取り組んでいきたい。自ら考えて行動する個人がたくさん暮らす地域は強い地域。これからも「まるごと緑」は、

地域創生のプラットフォームへ

執筆者プロフィール



森 裕之(もり ひろゆき)

個人と地域から起こした多様な活動を支援する「地域創生のプラットフォーム」として次世代にわたり、住みよい地域づくりをめざし続けます。